

北郷町文化財調査報告書第10集

田 中 遺 跡

県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001. 3

宮崎県北郷町教育委員会

田 中 遺 跡

県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



田中遺跡遠景

2001.3

宮崎県北郷町教育委員会

序

この報告書は、1999年度に宮崎県南那珂農林振興局が計画した県営中山間地域総合整備事業に伴い実施した田中遺跡の発掘調査報告書です。

調査の結果、多くはありませんが、縄文時代早期と後期の遺構・遺物が確認されました。

これらの調査結果は、生きた歴史資料として地域の歴史教育や文化財に対する理解と認識を深めるために、大いに利用されるべきものであります。本書が学校教育や生涯学習の場で幅広く活用されることにより、文化財の保護とその活用を通して今まで以上に地域の文化や歴史に対する魅力を感じ取っていただければ幸いに存じます。

最後に、真夏の猛暑の中で発掘作業に従事していただいた町民の皆様をはじめ、各関係機関の方々には多大な御協力をいただきました。ここに記し、心から感謝の意を表します。

2001年3月

北郷町教育委員会

教育長 川崎満也

例　　言

1. 本書は中山間地域総合整備事業（北郷地区8工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎県南那珂農林振興局より委託され北郷町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成11年7月19日から同年10月31日にかけて実施した。
4. 資料整理・調査報告書作成に伴う諸作業は、加藤由紀枝、谷元正子、外山明子の補助を得て行った。
5. 使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔高である。
6. 現地での実測・写真撮影は作業員の補助を得て、北郷町教育委員会生涯学習課主任平原英樹が行い、空中写真撮影については髙日測に委託した。
7. 出土品は北郷町教育委員会で保管している。
8. 本書の執筆・編集は平原が行った。

目 次

I	序 説	1
	1. 調査に至る経緯	1
	2. 調査の組織	1
	3. 遺跡の位置と環境	2
II	調査の記録	5
	1. 調査の概要	5
	2. A区の調査	5
	3. B区の調査	6
	1) 土層の状況	6
	2) 遺構	6
	①集石遺構	6
	②土坑	6
	③ピット群	6
	3) 遺物	9
	①縄文時代後期の遺物	1 0
	②縄文時代早期の遺物	1 0
III	結び	1 3
	報告書抄録	2 1

挿 図 目 次

第1図	田中遺跡周辺遺跡分布図	3
第2図	調査区位置図	4
第3図	B区土層断面図	7
第4図	B区遺構分布図	8
第5図	B区検出遺構実測図	9
第6図	B区出土遺物実測図 (1)	1 1
第7図	B区出土遺物実測図 (2)	1 2

図 版 目 次

図版 1	A区第1トレンチ	1 4
図版 2	A区第2トレンチ	1 4
図版 3	B区調査区遠景	1 5
図版 4	B区調査区全景	1 5
図版 5	B区(北)西側壁面土層	1 6
図版 6	B区(南)西側壁面土層	1 6
図版 7	集石遺構検出状況	1 7
図版 8	時期不明ピット群検出状況	1 7
図版 9	第1号土坑完掘状況	1 8
図版 10	第2号土坑完掘状況	1 8
図版 11	谷状急傾斜部遺物出土状況	1 9
図版 12	B区作業風景	1 9
図版 13	B区出土遺物	2 0

表 目 次

表1	縄文時代後土器観察表	1 0
----	------------	-----

I 序 説

1. 調査に至る経緯

平成10年度県営中山間地域総合整備事業における北郷地区の農用地開発は、7.0 haを対象に実施される予定であった（本調査は平成11年度実施）。この開発予定地区の中に周知の埋蔵文化財包蔵地である田中遺跡（北郷町大字大藤字田中）が含まれるため、北郷町教育委員会では、平成11年4月21日に南那珂農林振興局、県文化課、町開発整備課と北郷町農村環境改善センター会議室において、田中遺跡の措置に関する協議を行った。その結果、計画の変更が困難なため、発掘調査を実施し記録として残すことになった。

平成10年度に北郷町教育委員会が実施した周辺地域の試掘調査の結果では、周知の埋蔵文化財包蔵地である田中遺跡の周辺は全体的に土築の分布が薄く、遺構や遺物は確認されなかった。田中遺跡の範囲内であるB区については、石器が1点と縄文時代後期土器の口縁部が1点出土している。これをもとに、平成11年4月に協議を行った時点では、工事の実施計画図がまだ完成していなかったので調査区の範囲について正確な判断を下すことができなかつた。そこで、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内を本調査の中心とし、その周辺の未確認の部分については、山林の伐採・搬出終了後、試掘調査を実施し、その結果をみて調査の範囲について再考することにした。

調査の時期については、工事の着工予定が早く7月下旬から8月の予定であり、事業は平成12年度をもって終了予定という計画であることから、早急に調査を実施する必要があつた。調査期間は平成11年7月19日から平成11年10月31日までである。

2. 調査の組織

〔平成11年度〕 発掘調査実施

調査主体 北郷町教育委員会

教育長 川崎満也

生涯学習課長 鈴木敦子

生涯学習課長補佐兼係長 河野 透

庶務担当 主 事 谷元真理

調査担当 主 事 平原英樹

発掘作業員 荒武ユミ子 荒武ハレエ 稲田博仁 梶谷京子 加藤えみ子

加藤由紀枝 鳴原武男 瀬戸山正志 谷口美恵子 外山明子

中竹スミ子 西山五月

[平成12年度] 整理作業及び報告書刊行

調査主体 北郷町教育委員会

教育長 川崎満也

生涯学習課長 鈴木牧子

生涯学習課長補佐兼係長 河野真一

庶務担当 主 事 谷元真理

調査担当 主 事 平原英樹

整理作業員 加藤由紀枝 谷元正子 外山明子

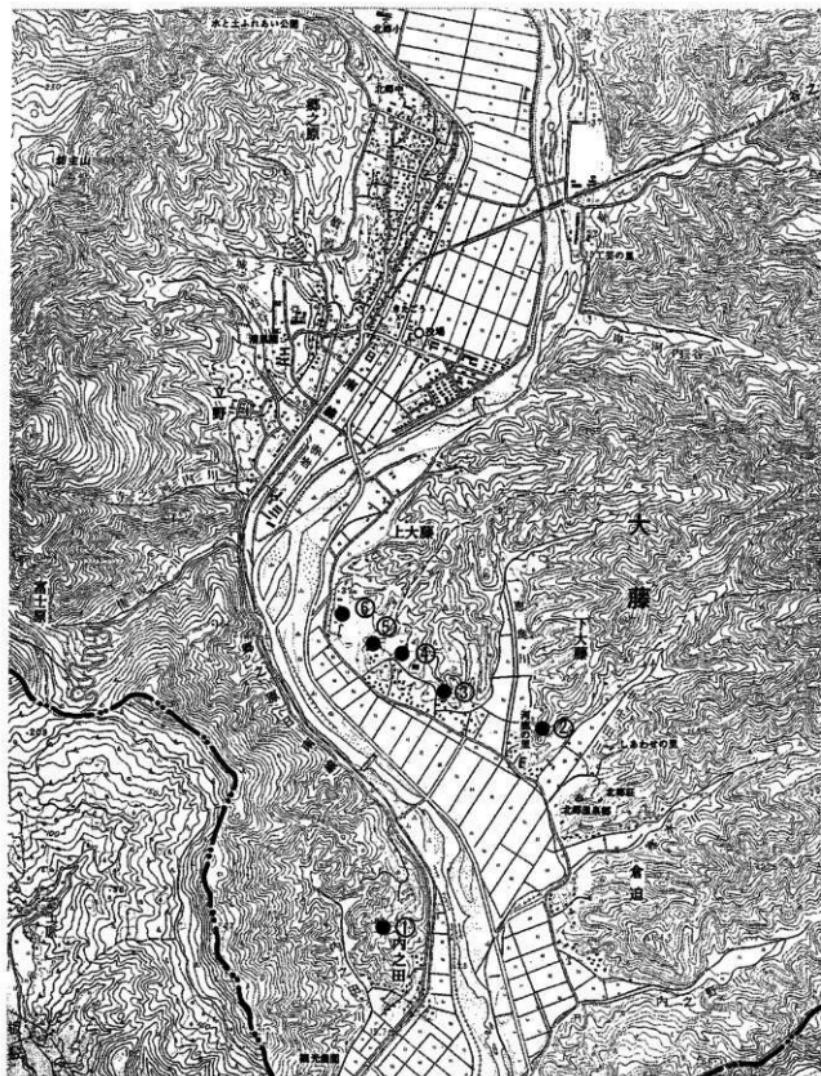
3. 遺跡の位置と環境

北郷町は宮崎県南部の山間部に位置し、北西部は宮崎市、清武町、田野町に接し、南東部は日南市に接する。周囲を山に囲まれ、広さは東西19.1km、南北16.0km、面積は178.49km²、そのうちの87.5%を山林が占めている。本町最高峰の鶴塚山(1,119m)と小松山(988m)連山の山岳が町北西部にそびえ、鶴塚山に源を発する広渡川と支流黒荷田川が山間地の中央部を流れ、郷之原、一之瀬で猪八重滝群から流れる猪八重川と合流し、平坦地で穀倉地帯の郷之原、大藤を経て日南市へ注いでいる。このような地勢から、本町は南東部を日南市に接し水田を主とする大藤、郷之原地区の平坦地域と北西の宮崎市から三股町に接し樹園地を中心とする北河内地区の山間地域の2地区に大別される。

今回調査を実施した田中遺跡は、北郷町大字大藤字田中に所在する。田中遺跡の所在する大藤地区は、町の中央を南に貫流する広渡川の左岸に位置し、町の南東部にあたる。ここは広渡川周辺に広がる水田・畑地を中心とする平野部である。発掘調査が大藤地区で実施されるのは田中遺跡が初めてである。そのため、周辺遺跡の詳細な遺物資料がないので、調査に入るまで遺跡の性格について把握し得る資料はほとんど得られなかった。遺跡のすぐ南東方向にはほぼ同じ標高の丘陵があり、そこは墓地になっている。地元の人の話では、以前墓穴を掘る際にここで石斧が出土したことである。

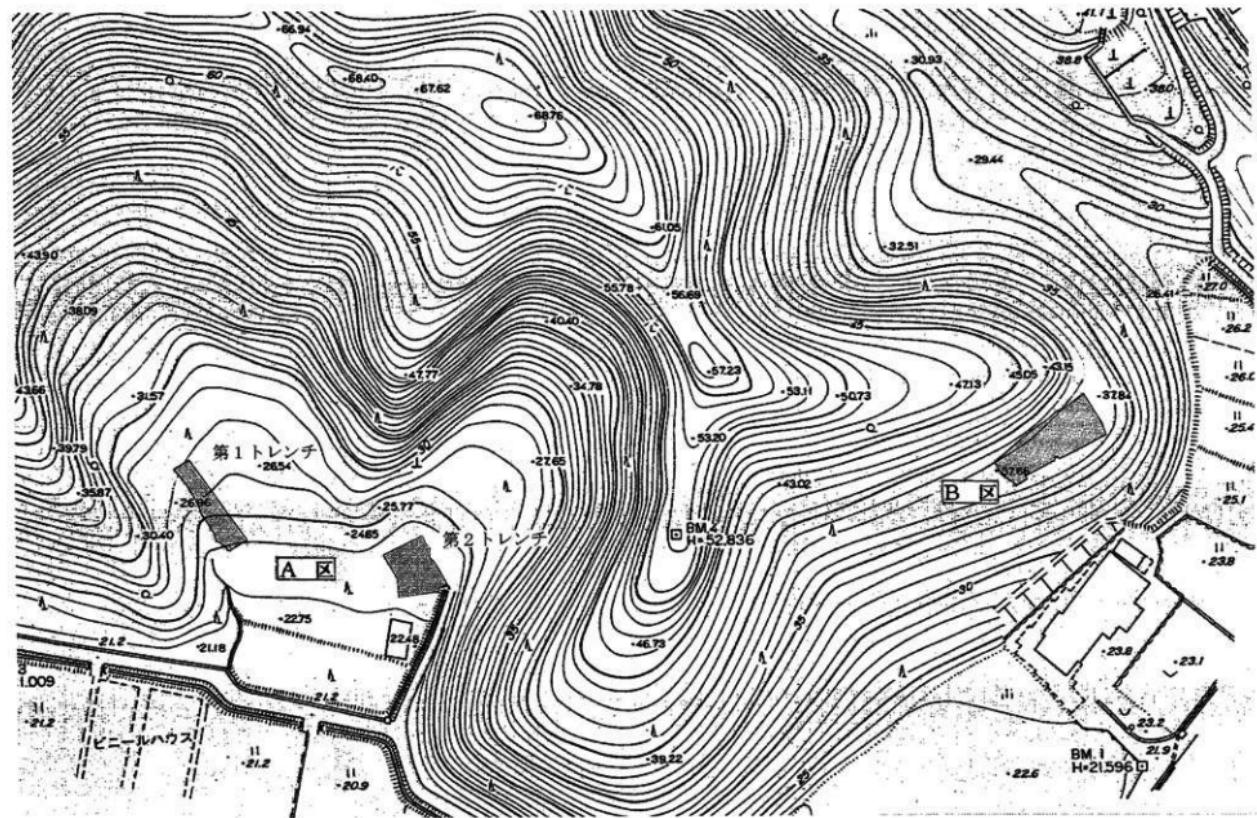
調査区の南から西側にかけて崖状に削られており、その下の水田を挟んで目の前に老人養護施設の建物が立つなどだらかな丘陵平坦部がある。地形的見ると、今回の調査区からこの老人養護施設がある丘陵先端部にかけての範囲が、本来遺跡の中心となる部分のようである。現在、その部分は削られて水田と宅地になっている。つまり、旧地形では現在遺跡が立地する丘陵の先端部がもう少し南西方に向に続いていたようである。このあたりの山間部の地盤は岩盤であり、土層の堆積は極めて薄い。露出した地盤は風化の作用を受けて脆弱になる。当遺跡においても地滑りと思われる痕跡が確認されており、この周辺地域の地盤の脆さを伺い知ることができる。

周辺には縄文時代の遺跡である堀之内遺跡、宮園遺跡、尾崎遺跡等が田中遺跡と同様に丘陵の先端部に所在している。大藤地区に所在する縄文時代の遺跡は、丘陵の先端部を結んでほぼ一直線上に並ぶ形で密集しているのが特徴である。



- ① 高寺城跡 ② 田中遺跡 ③ 堀之内遺跡
 ④ 宮園遺跡 ⑤ 尾崎遺跡 ⑥ 山澄遺跡

第1図 田中遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査区位置図 (1/1,000)

II 調査の記録

1. 調査の概要

A区ではトレンチを2カ所設定して、遺構・遺物の検出に努めた。A区は表土直下から全体的に粘土質の土壤であり、重機における掘削でかなりの量の地下水が上がってくる状態であった。遺物の出土は、第1トレンチのみ近世陶磁器の破片が近現代の陶磁器に混ざって出土したが、表探によるもののが多かった。包含層のない粘土質土壤で作業が困難なため、トレンチ2カ所のみを調査し遺物は主に表探により収集した。遺構は検出されなかった。

B区は田中遺跡のちょうど中心部に該当する。旧地形は東から南西に向かって傾斜する地形と考えられるが、調査地の現況は平坦な畑地の跡で山林となっていた。重機でI層を除去し、調査対象面積180m²を精査した。表土を除去すると調査区の南側から西側にかけてかなり勾配のきつい谷状の落ち込みになっていた。地滑りにより地盤そのものが南北方向へ崩れて流されたためであろう。II層は地盤崩壊の際に周囲の土壤の流れ込みによって形成された層である。主に南側の谷状急傾斜部に堆積している。堆積の様子が何層にも分かれているので細分した。遺物は検出されなかった。

IV層の黒褐色土層とV層の二次堆積のアカホヤの層は遺物包含層であり、縄文時代後期の土器片が出土しているが、その数は少ない。そのほとんどが調査区南側の谷状急傾斜部の落ち込み部分からの出土である。IV層下部とV層上部からは中岳II式の口縁部と胴部が出土している。

調査区の東側はすぐに山の尾根筋につながっており、全体的にVI層まで削平を受けていた。VI層では縄文時代早期の集石遺構が1基検出されたが、遺物は検出されなかった。しかし、事前に実施した確認調査ではVI層から石鏃が1点出土している。

調査区の北側は南側と比べると遺構・遺物の存在が薄い。ただ、数は少ないと時期不明のビット群が検出されている。埋土中に遺物は含まれていなかった。ビットは北側を中心で検出されているが、これは南側ほど地盤崩壊の影響がなかったせいであろう。

2. A区の調査

A区は田中遺跡に接する平坦地ということで、確認のため発掘調査を実施することにした。A区の調査は約176m²を対象に実施した。トレンチを2ヶ所設定して、重機による表土剥ぎを始めた。A区は腐植土等の土壤の堆積は皆無で、全体的に粘土質の地質であり、重機により表土を除去すると地下から水が上がってくる状況であった。調査の期間中、梅雨の時期ということもあって、連日の雨に悩まされ作業が中断された。水はけの非常に悪い場所であったので、表土に混じる遺物のみを取り上げて調査を終えた。

調査の結果、遺構は検出されなかった。遺物は近世の白磁器や陶器の破片もみられるが、近現代の陶磁器等が多量に混ざっていた。A区は田中遺跡の範囲外であることが確認された。

3. B区の調査

1) 土層の状況（第3図）

前述のように、調査地の旧地形は南西方向に向かって傾斜する地形と考えられ、それがさらに地滑りによる地盤の崩壊によって南側では谷状急傾斜の落ち込みを、北側では緩傾斜の窪地を形成している。最も標高が高い東側ではほとんどアカホヤは残っておらず、主に南に向かって急傾斜する落ち込み部を中心に二次堆積のアカホヤが確認された。当地における基本層序は以下のとおりである。

I層：表土。暗灰黄色土（2.5 Y 4/2）。II層は地滑りによって周囲の土の流れ込みが確認できる層である。IIa層：明黄褐色粘質土（10 YR 6/6）。IIb層：にぶい黄橙色粘質土（10 YR 6/3）。IIc層：明褐色砂質土（7.5 YR 5/8）。二次堆積のアカホヤが混ざる。IId層：明黄褐色粘質土（10 YR 6/6）。IIe層：灰黄褐色粘質土（10 YR 6/2）。IIIf層：灰黄褐色粘質土（10 YR 4/2）。I Ig層：にぶい黄褐色粘質土（10 YR 5/4）。IIh層：黄褐色砂質土（10 YR 5/8）。III層：灰黄褐色砂質土（10 YR 4/2）。IV層：黒褐色砂質土（10 YR 3/1）。遺物包含層。V層：明赤褐色砂質土（5 YR 5/8）。二次堆積のアカホヤが主である。VI層：にぶい黄橙色粘質土（10 YR 6/4）。

2) 遺構（第5図）

遺構は全てVI層上面で検出された。確認できた遺構は、土坑2基、集石遺構1基、ピット群である。

①集石

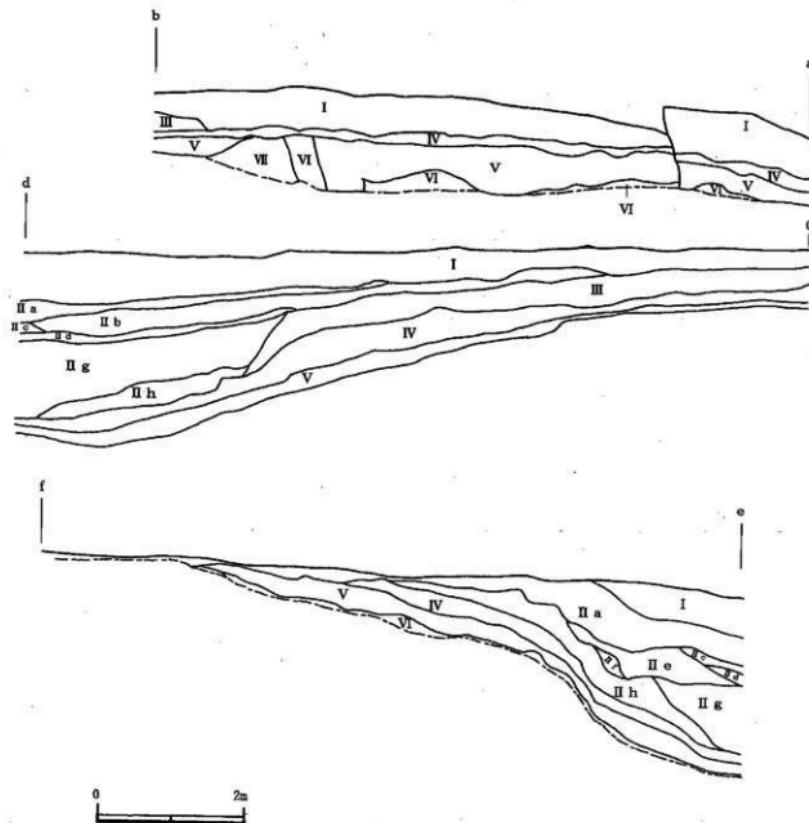
縄文時代早期の遺構としては、集石遺構が1基検出された。集石遺構は、調査区の南側の谷状に落ち込む急傾斜の頂上部にあたる平坦部においてVI層上面で検出された。掘り込みを持たずに地面に直接配置してある。集石を構成する礫のいくつかは赤く変色したものもあり、手のひら以上に大きな礫はない。また、河原石のように滑らかな礫と鋭角な割れ目を有する破碎礫とが混在している。堀り込みはないが、下部の礫のいくつかはVI層中に突き刺すような状態で配置している。調査区の南東隅でも集石遺構らしき礫の破片がいくつか確認されたが、表土直下がVI層までかなり削平されており、遺構として断定するには至らなかった。

②土坑

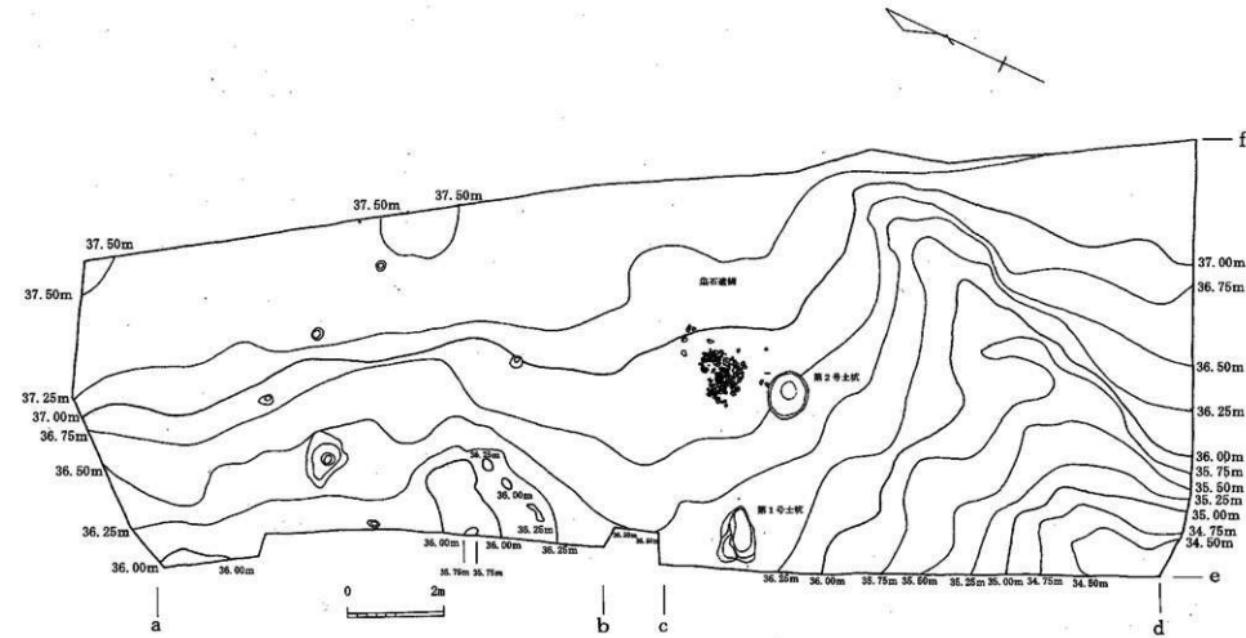
検出された土坑2基の時期は不明である。第1号土坑は長方形、第2号土坑は円形のプランを呈する。埋土はほとんどがVI層より少し暗めの土に少量の炭化物が混ざっており、遺物は含んでいない。

③ピット群

時期は不明である。主に調査区北側の傾斜頂上部から地滑りによるものと思われる緩傾斜窪地に広がる範囲で確認された。直径は25cm程度で、6つを検出した。ピット内からの遺物の出土はなく、周辺からも遺物は確認されていない。

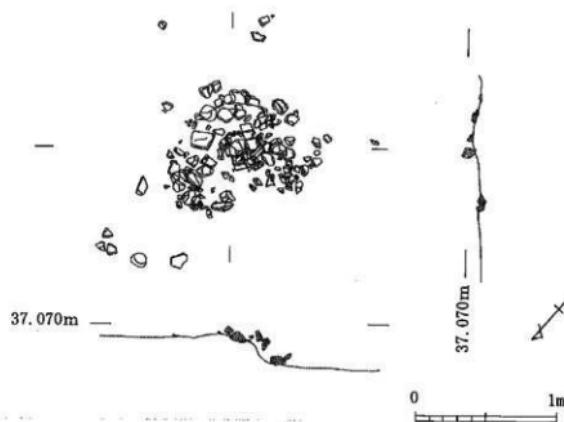


第3図 B区土層断面図

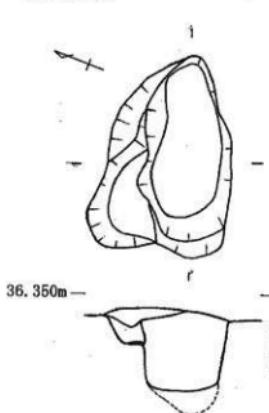


第4図 B区構造分布図

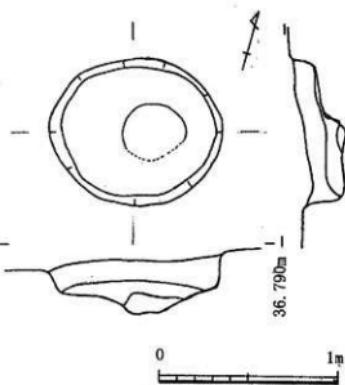
集石遺構



第1号土坑



第2号土坑



第5図 B区検出遺構実測図

3) 遺物 (第6図、第7図)

IV層とV層の包含層からの遺物の出土量は非常に少ない。VI層においては、石鏃1点のみの出土である。先に記載した南側急傾斜の落ち込みが始まる部分とさらにその最深点では土器が出土している。この部分は、地滑りにより土層が何層にも流れ込んだ様子が伺え、旧地形が自然災害的な影響で変化を受けていることがわかる。このように、調査区内の土層は全体的に複雑な様相を呈しており、明確な層位と位置関係における出土遺物の把握は困難であった。

①縄文時代後期の遺物

本調査に先立って実施した平成10年度の確認調査で、中岳II式土器の口縁部が出土している。口縁部はやや丸みをおびており、口縁部はわずかに内径し、その内面の段は滑らかである。口縁部文様帶には逆「U」字凹線文が施文されている（第6図1）。二次堆積のアカホヤ直上の黒褐色土層下部からの出土で、IV層にあたる。

今回の調査では、調査区南側の谷状急傾斜の落ち込み部のV層上部から、中岳II式土器の胴部破片が出土した（第6図2）。強く張り出した胴部の上位に2本の凹線文がある。その2本の凹線文のうち下段の凹線文上にのみ逆「U」字凹線文が施文されている。表面は丁寧に磨いてあり、焼成もしっかりとしている。谷状急傾斜の落ち込み部周辺では無文の土器片が3点出土している（第6図4、5、6）。そのうち4と5はほとんど2と同じ場所で同じ層からの出土であり、他に磨石が1点（第7図1）と打製石斧が1点（第7図2）出土した。また、谷状急傾斜の落ち込み部の最深部ではIV層下部から平底の土器の底部が出土した（第6図3）。出土した遺物は、そのほとんどが南側急傾斜部の落ち込み部分及びその周辺から検出されている。

調査区北側部分では、遺物の出土はほとんど見られない。調査区中央部の西側壁面近くのV層から無文の土器片が2点出土しているのみである（第6図7、8）。

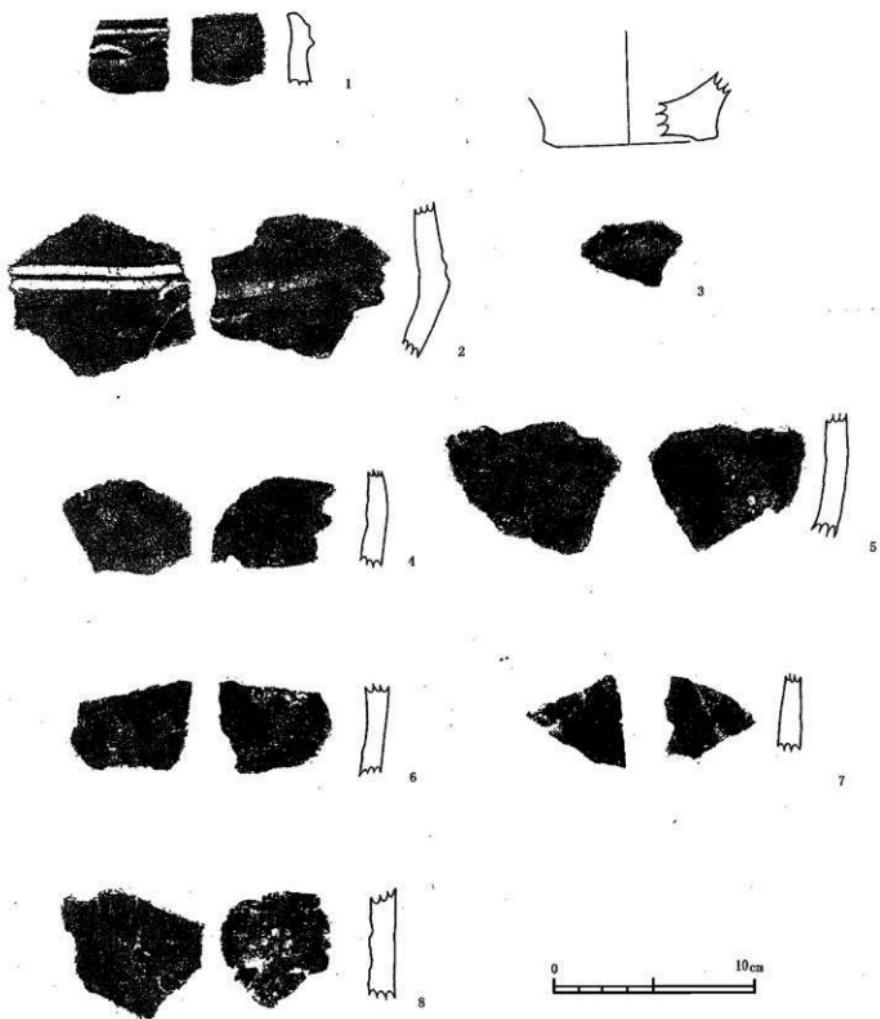
以上の遺物出土状況から判断すると、B区では東側がすぐに山の尾根筋にあたり、東側への遺跡の広がりは考えられず、旧地形では南から西側にかけて地形が開かれていると想像される。現在に至るまでの間に、地形の変化によって遺跡本体の大部分が喪失してしまったものと考えられる。

②縄文時代早期の遺物

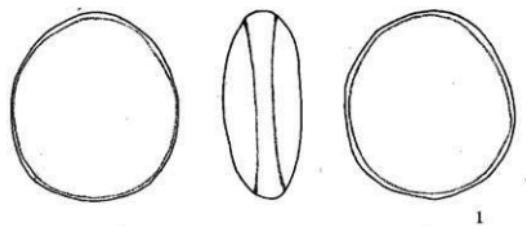
本調査に先立って実施した平成10年度の確認調査で石鎌が1点（第7図3）出土した。今回の調査での集石遺構の検出面であるVI層に相当する。出土地点は南側の谷状急傾斜部の中間地点である。早期の遺物としては、この石鎌が1点のみで土器の出土は見られなかった。

表1 縄文時代後期土器観察表

番号	出土地点	色 調		調 整		胎土粒子	焼 成	備 考
		外 面	内 面	外 面	内 面			
1	B区南	にぶい赤褐	明赤褐	ミガキ	ナ デ	2ミリ以下	良 好	口縁部
2	B区南	にぶい橙	にぶい黄褐	ミガキ	ナ デ	2ミリ以下	良 好	胴部
3	B区南	橙	浅黄橙	ナ デ	ナ デ	2ミリ以下	良 好	底部
4	B区南	橙	にぶい黄橙	ナ デ	ナ デ	2ミリ以下	良 好	
5	B区南	橙	にぶい黄橙	ナ デ	ナ デ	2ミリ以下	良 好	風化
6	B区南	橙	にぶい黄橙	ナ デ	ナ デ	2ミリ以下	良 好	
7	B区北	明赤褐	にぶい黄橙	ナ デ	ナ デ	2ミリ以下	良 好	
8	B区北	にぶい橙	にぶい橙	ナ デ	ナ デ	2ミリ以下	良 好	



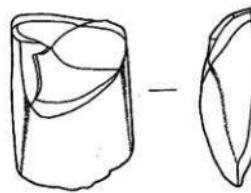
第6図 B区出土遺物実測図（1）



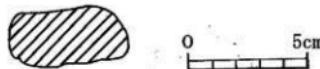
1



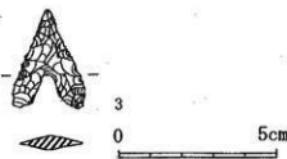
0 10cm



2



0 5cm



3

0 5cm

第7図 B区出土遺物実測図（2）

III 結び

今回の調査によって、田中遺跡では少なくとも縄文時代早期と後期に人々の生活の痕跡があることが明らかになった。早期については、遺構は集石遺構が1基、遺物は石鏃が1点のみの出土しかなかったが、これは早期に相当するVI層部分が調査区東側の山側の部分で大幅に削平されており、また調査区の南から西側にかけては旧地形の地盤そのものが地滑りのため欠落しているなど、自然発生的な物理的要因による影響が関係していると考えられる。後期については、中岳II式の口縁部及び肩部が出土しており、縄文時代後期後葉の生活文化形態の一要素を知ることが出来た。中岳II式土器の出土は北郷町内では初めてである。

田中遺跡では遺構・遺物とともに検出されたものはごくわずかであったが、今回の調査で得られた資料は、周辺遺跡における出土遺物との関係を検討し、県南地域の縄文文化を構成する一要素としての生活様式について詳細な検討を加えていく上で重要な意味を持つものである。

参考文献

『統編 北郷町史』北郷町役場 1978

柴畠光博「東南部九州におけるある縄文土器の型式組列-中岳II式土器の再検討-」『鹿児島考古』第23号 1989
『北郷町遺跡群詳細分布調査報告書』北郷町文化財調査報告書第1集 北郷町教育委員会 1990



図版1 A区第1トレンチ



図版2 A区第2トレンチ



図版3 B区調査区遠景



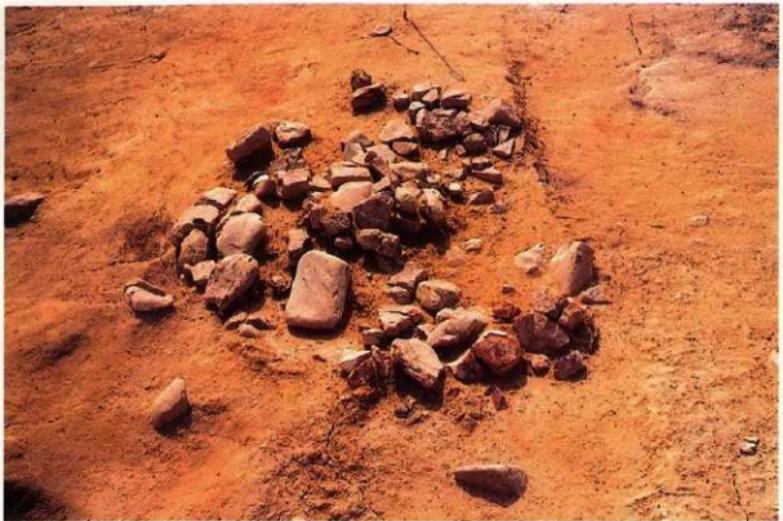
図版4 B区調査区全景



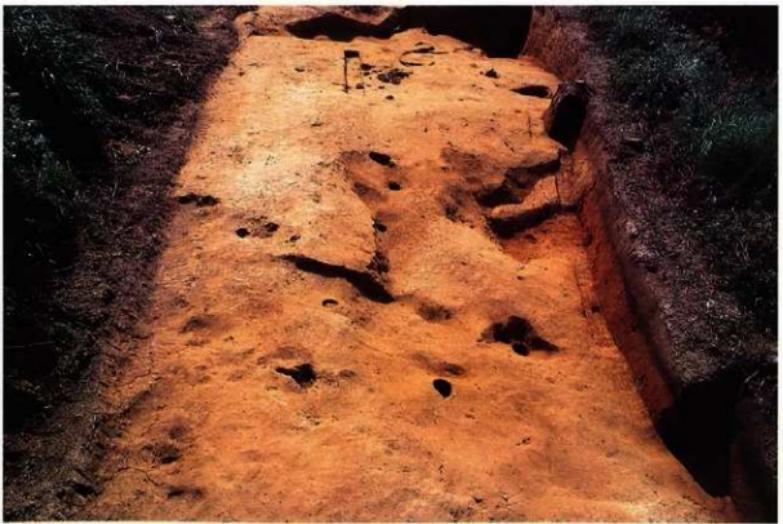
図版5 B区(北)西側壁面土層



図版6 B区(南)西側壁面土層



図版7 集石遺構検出状況



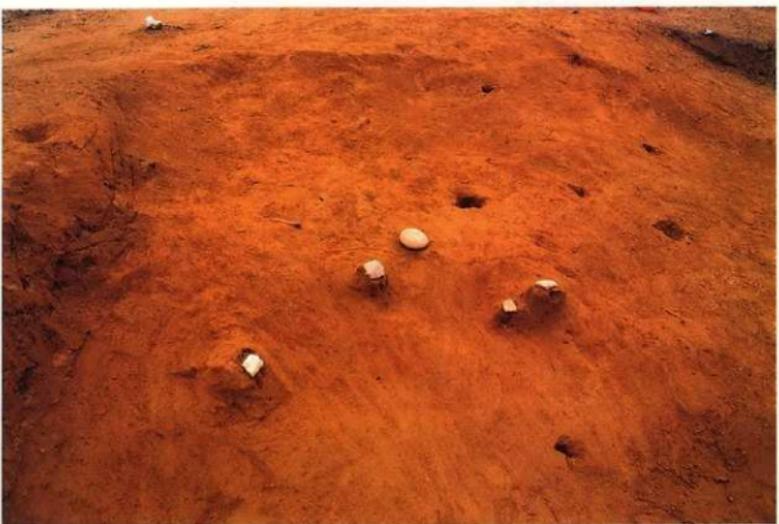
図版8 時期不明ピット群検出状況



図版9 第1号土坑完掘状況



図版10 第2号土坑完掘状況



図版11 谷状急傾斜部遺物出土状況



図版12 B区作業風景



图版13 B区出土遗物

報告書抄録

フリガナ	タナカイセキ			
書名	田中遺跡			
副書名	中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書			
卷次				
シリーズ名	北郷町文化財調査報告書			
シリーズ番号	第10集			
編集者名	平原英樹			
発行機関	北郷町教育委員会			
所在地	宮崎県南那珂郡北郷町大字郷之原乙1477番地			
発行年月日	2001年3月31日			
収蔵遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
田中遺跡	宮崎県南那珂郡北郷町大字大藤字田中	99.7.19 ～99.10.31	355m ²	農用地開発
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文時代早期、後期	集石遺構、土坑	縄文土器、石器	

北郷町文化財調査報告書第10集

田 中 遺 跡

県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月

発 行 宮崎県北郷町教育委員会

〒889-2492

宮崎県南那珂郡北郷町大字郷之原乙1477

TEL0987(55)2111・FAX0987(55)2157

印 刷 株式会社 おび印刷

